

資料紹介

養祖母松栄院と養孫松平春嶽

—松平文庫「松栄公年譜稿本」「祖妣徳川夫人碑陰記」の紹介—

堀井 雅弘*

はじめに

1. 養祖母松栄院と養孫松平錦之丞
2. 書写者平本平学・添削者橋本左内
3. 松栄院の遺髪を埋めた「小さき御墓」

まとめにかえて

はじめに

福井藩主松平^{なりつぐ}齊承の正室は浅姫（瀨子）といい、齊承とは文化14年（1817）9月27日に縁組、文政2年（1819）11月29日に婚姻している。浅姫の父は將軍徳川^{いえなり}家斉で、將軍家から越前松平家への入輿は慶長16年（1611）、忠直の正室勝姫（天崇院、父は秀忠）以来のことであった。

浅姫は天保6年（1835）閏7月2日に齊承が逝去した後、落飾して松栄院と称し、続く^{なりさわ}齊善・慶永（春嶽）の代も、その養母・養祖母¹として、そして將軍の息女（家斉）・妹（家慶）・叔母（家定）として、福井藩・幕府の双方で重きをなした（以下、浅姫は「松栄院」、慶永は「春嶽」に統一する）。とくに春嶽の代は、幕政への関与を強めていくことになるが、その中で「松栄院の力」が必要とされる場面もあったのではないかと目されている²。

このように松栄院は、春嶽にとって養祖母というだけでなく、藩屏として守護すべき將軍家の身内であり、幕政において目的を遂行するうえでも、頼りにする人物の一人であった。

そこで本稿では、松栄院と春嶽の関係を見直す一助として、春嶽が残した松平文庫「松栄公年譜稿本」「祖妣徳川夫人碑陰記」（福井県文書館保管）³から、春嶽の松栄院への視点をたどっていく。

1. 養祖母松栄院と養孫松平錦之丞

松栄院と春嶽（当時、松栄院は36歳・春嶽は11歳）の結び付きは天保9年（1838）、越前松平家の代替わりに伴う養子縁組によって生まれた。春嶽は当時、松平^{きんのじょう}錦之丞（父は御三卿田安^{なりまさ}齊匡）といい、松山藩主松平^{かつよし}勝善の仮養子であった⁴。越前松平家との養子縁組は、齊善の不慮の逝去に起因しており、齊善が在国中であったことも関係して、多方面で調整が図られている。いわゆる末期養子であるが、それは幕府の主導で調えられていった。

* 福井県文書館古文書調査専門員

まずは、ここで逝去から養子縁組までの経緯を確認しておこう。天保9年(1838)、斉善の入部もこの年で、閏4月11日に江戸を出発して26日に福井へ到着していた。越前松平家の家史⁵⁾によると、斉善は7月11日頃に感冒の症状を発したといい、それが逝去の遠因になったようである。その後、持病の喘息に疥癬の感染もあいまって症状は軽重を繰り返し、下旬に入って容体が悪化すると、27日⁶⁾に急逝した。その一報は、御書院番頭御用人御奏者兼秋田八郎兵衛(副使に御使番上坂藤助)を使者として、9月2日⁷⁾に江戸へもたらされることになる。

使者が到着したその日、江戸では聞番大道寺七右衛門が老中太田資始^{すけもと}(掛川藩主)に呼び出され、「御用之儀候間」、翌3日四時(午前10時頃)に名代として川越藩主世嗣松平斉省^{なりさだ}・松江藩主松平斉貴^{なりたけ}が登城あるようにすべしという書付(「松平越前守^(斉善)」宛)を渡されている。

そうして3日、名代⁸⁾が登城したところ、黒書院溜間において老中が列座する中、資始から書付を以て家慶の「思召」が仰せ渡された。資始によると、斉善の病状は家慶の耳にも達しており、「跡々之儀」は考えもあるので安心して養生に専念するよう仰せ出だされたという。

仰せ渡しが済むと、名代は常盤橋上屋敷(江戸城外郭常盤橋門内)へ入り、家老に家慶の「思召」を申し伝えて書付を渡し、ついで「今日御越無之御同姓様」(津山藩主・川越藩主・明石藩主・松江藩主・母里藩主)の名代にも同様に申し伝え、伝達を終えた旨資始に届けて役目を終えた。

また、前日に続いてこの日も、七右衛門が資始に呼び出され、用人から「御用之儀候間」、翌4日四時に斉善の名代として「一類之中一人」登城あるようにすべしという書付(「松平越前守家来^(斉善)」宛)を渡されている。

4日、再び名代⁹⁾が登城すると、前日と同様に黒書院溜間において老中が列座する中、資始から「松平錦之丞儀養子被仰付之」と達せられ、斉善の逝去の一報から3日目にして斉善と春嶽との養子縁組は調べられた。名代は、この時、続けて老中水野忠邦(浜松藩主、福井藩御用御頼)から春嶽の家格と座順にかんする書付を渡されているが、その忠邦は前日の3日、上使として田安家屋敷(江戸城北の丸田安門内)へ赴き、家慶の内意として、病気の斉善に「万一不慮之儀茂有之候ハハ」春嶽を養子に命じ出だすことになることを伝えるとともに、福井藩の家老を呼び出し、家慶の沙汰として、次のような書付(資料1)を渡している。

資料1「家譜」(天保9年9月3日条より)¹⁰⁾

此度養子被仰出候ハ、松栄院様御願之趣茂有之候ニ付、引移之砌大奥江登城、其節御目見御道具被下、御本丸方直ニ引移可有之旨可被仰出積ニ候、此段内々申聞置候様ニ与御沙汰ニ候事

忠邦によれば、越前松平家に養子が仰せ出だされるその背後には「松栄院様御願之趣」もあったのだという。そのため、引移(田安家屋敷から常盤橋上屋敷への引っ越し)の際は、大奥へ登城し、そこでお目見えと道具拝領を済ませ、本丸から直に上屋敷へ入るよう仰せ出だされることになろうという。ここで養子縁組と松栄院との関係が告げ知らされているが、この「内々」の申し聞かせも含めて、家慶の沙汰であった。どのような「御願」であったか、その詳細は知り得ないものの、松栄院の幕府における影響力の一端は窺えよう。

2. 書写者平本平学・添削者橋本左内

結果として、春嶽が養子に仰せ出だされる、その道筋をつけるために一定の役割を果たしていた松栄院は、安政4年（1857）閏5月10日、55歳で逝去した。

前出の「家譜」には¹¹⁾、前々日の8日に春嶽が老中牧野忠雅（長岡藩主）に伺書を差し出して「拙者儀神田橋御住居江罷越、御様子ニ寄附添御看病申上度候」と伺いを立てたとあり、忠雅から公用人多田弥一郎を通じて、即刻、伺いのとおりに取り計らうよう達せられている（この時、忠雅は「殊ニ寄御止宿」の可能性も含み置いている旨あわせて達している）。そうして9日、春嶽は「松栄院様為御看病」神田橋中屋敷¹²⁾へ入り、9日はそのまま止宿して翌10日の七半時（午後5時頃）に常盤橋上屋敷へ戻った。ただ、この9日から10日にかけての一つ書きには「日々被為入候得共不記之」という但し書きがあり、この頃は「日々」、上屋敷と中屋敷との間を行き来していた¹³⁾ようである。

この他、9日には本丸から老女中飛鳥井が中屋敷へ遣わされて松栄院を見舞い、10日の逝去前には聞番真杉所左衛門が忠雅・老中阿部正弘（備後国福山藩主）・若年寄本庄道貫（美濃国高富藩主）に「昨朝申上候後」の松栄院のようす¹⁴⁾を伝え、逝去後には「未表向御弘メハ無之候得共」奥向より内々に正弘に松栄院の葬送先にかんする内願¹⁵⁾を差し出している。

このように越前松平家の家史から、松栄院が逝去する前後の春嶽の行動や藩の対応を窺い知ることができ、このことは、春嶽に近侍した中根雪江も史書『昨夢紀事』（安政6年（1859）11月7日に起稿して万延元年（1860）6月21日に脱稿）¹⁶⁾に書き留めており、そこからさらに春嶽のようすや中屋敷での行動を明らかにすることができる。

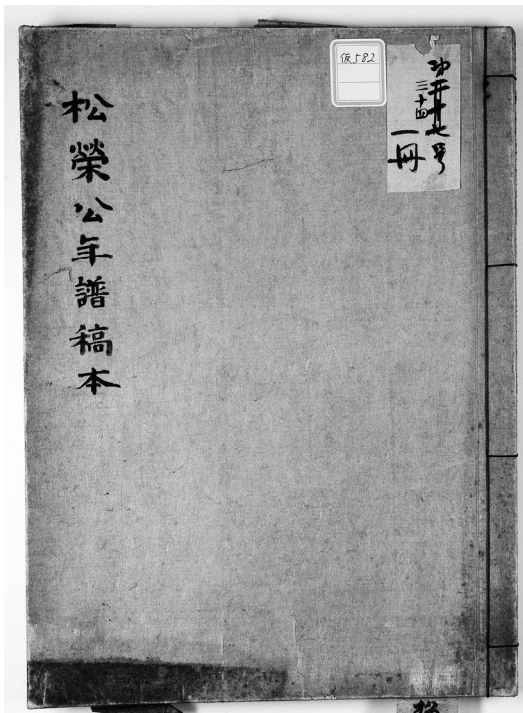


写真1 松平文庫「松栄公年譜稿本」（表紙）

雪江によると、春嶽は「今年春の末つかたより」松栄院が不調のようであると伝え聞いており、「御参府の砌より」いつも以上に心を尽くして接するようにはしていたという。閏5月4日には、官医岡櫟仙院が常盤橋上屋敷に春嶽を訪ね、留守にしていた春嶽に代わって雪江が応対しており、松栄院の病状を聞き置いている。以後、納棺までの日々が詳記されているが、これは雪江であるからこそ留め得た記録であり、前述の家史の細部を補うとともに侍臣としての対応や春嶽への配慮を汲み取ることができる。

これら家史・『昨夢紀事』は第三者の目線であるため、春嶽の内面に踏み込むことはできないが、その春嶽当人が「松栄公年譜稿本」と題した著作（写真1）を残しており、そこには春嶽本人による次のような序文（資料2）がある。

資料2 「松栄公年譜稿本二冊小序」 (「松栄公年譜稿本」)

大母松栄公年譜ハ春岳所著也、夫 大母君病中日々孤省視シテ自ラ其薬汁ヲ嘗ム、^(ママ)三月九日孤館ニ登リ 君ガ病床側ニ侍ス、君ノ病弥進シテ胸中潜々タリ、同夜頻々昏睡撮空摸床或上竄ヲ見ル、翌十日辰鼓遂捐館シ王フ、年譜中詳悉セリ今此ニ不贅、十九日喪ヲ発シ、廿九日発棺シテ遂西久保天徳寺ニ葬ル、本月五日ヨリ今日ニイタル迄日々神田橋ニイタル、予実天保九年ヨリ本年丁巳ニイタル迄 君之鴻遇ヲ受クル事実々浅々ナラストス、故ニ 君之行状ヲ後世ニ伝ヘント欲スルヲ以、三月十九日ヨリ此稿本ヲ起シ、同廿九日ニイタリテ全ク脱稿ス、命侍臣平本良載コレヲ書記セシメテ明道館幹事臣橋本紀ニ命シテ削正セシム、紀忽ニ返呈ス、復良載ニ命シテ誌サシム、結構全成ル、遂ニ政暇良載ノ所記ノ稿本ヲ以テ浄写ス、安政五戊午年九月卒業テ越国ノ秘庫ニ蔵ム、此稿本二冊火ニ投ニ不忍故仮ニ表装ス、嗚呼良載今ハ亡ヒタリ、 君ノ逝ヨリ^(ママ)三年ノ日月ヲ経過ス、駒隙奔々哀哉、于時安政六年己未三月十四日書於冥々齋中

(読点は執筆者による)

序文によると、松栄院が逝去した閏5月、春嶽は5日から29日まで神田橋中屋敷に「イタル」という。「松栄公年譜稿本」はその間、19日に「君之行状ヲ後世ニ伝ヘント欲スルヲ以」起稿し、29日に脱稿しており、日々、上屋敷と中屋敷との間を行き来しながら¹⁷⁾、書いていったようである(稿本A)。その後、稿本Aを平本平学に書写させ、それを以て福井の橋本左内に添削させたといひ(稿本B)、稿本Bが返戻されると、再び平学に書写させ(稿本C)、政暇を縫って稿本Cを浄写していつ

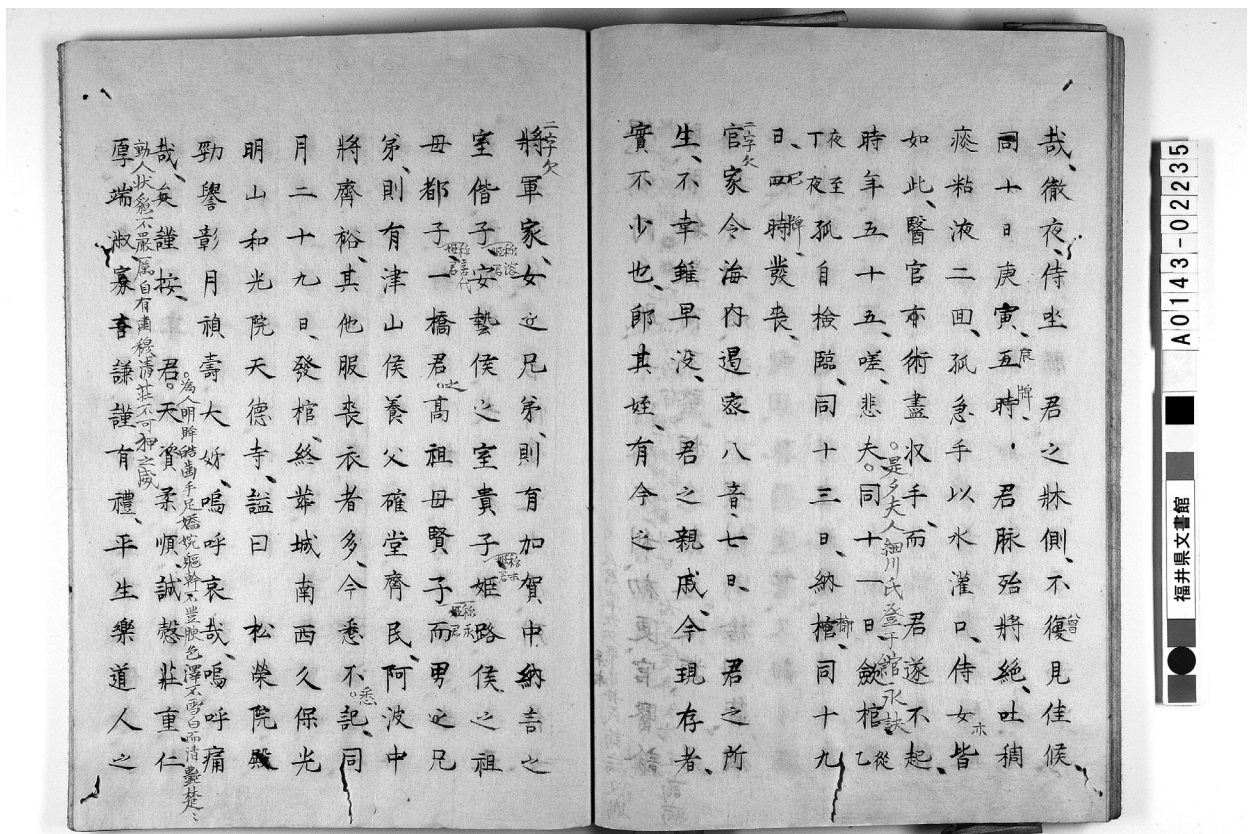


写真2 「松栄公年譜稿本」 (稿本Bの添削例)

た（稿本D）。そして、隠居後で急度慎中¹⁸⁾の翌5年9月に浄写を終えて「越国ノ秘庫」へ収めたという。

このように「松栄公年譜稿本」は、その成立の過程でA～Dの4冊が作成されたようである。ここで春嶽は「此稿本二冊火ニ投ニ不忍故仮ニ表装」したとしている。「此稿本二冊」というとおり、「松栄公年譜稿本」は2冊が合綴されていて、1冊目には校閲の跡が、2冊目には添削の跡がある。1冊目の原文には2冊目の添削が反映されており、前者が稿本C、後者が稿本B（写真2）とみられる。

その他の稿本については、うち1冊が福井市春嶽公記念文庫「松栄君年譜」（福井市立郷土歴史博物館所蔵）¹⁹⁾として現存している。「松栄君年譜」には紙片（年未詳）が挟み込まれており、そこに「春岳公御自筆」とある。稿本A・Dはともに春嶽の自筆になるが、「松栄君年譜」は美装して専用の木箱（年未詳）に収められている。また文字も浄写を重ねたとみられ、一見して稿本Dとわかる（残る1冊、稿本Aの現存は未詳）。

序文に戻って、結びには「良載今ハ亡ヒタリ 君ノ逝ヨリ三年ノ日月ヲ経過」したとあり²⁰⁾、浄写を終えた安政5年9月からさらに半年後、引き続き急度慎中であつた翌6年3月14日の日付が

表 松平文庫「松栄公年譜稿本」の構成

| 構成 | 内題 | 日付 | 備考 |
|--------------------|--|-------------|--------------------------------|
| 序文 | 松栄公年譜稿本二冊小序 | 安政六年己未三月十四日 | |
| 稿本C | 1 大母松栄君年譜（二字下げ） | 安政丁巳夏閏五月 | |
| | 2 故従四位上行左近衛権少将兼越前守源朝臣齐承公夫人徳川氏行状（三字下げ） | 安政丁巳歳閏五月 | |
| | 3 誌版正（三字下げ） | （なし） | |
| | 4 石槨裏面（三字下げ） | （なし） | |
| 稿本B | 1 大母松栄君年譜（一字下げ）概伝（三字下げ） | 安政丁巳夏閏五月 | 「大母松栄君年譜」は朱筆「概伝」に朱筆で取消記号「夏」は朱筆 |
| | 2 碑陰銘三字宜削（三字下げ）故従四位上行左近衛権少将兼越前守源朝臣齐承公夫人徳川氏行状（二字下げ） | 安政丁巳歳閏五月 | 「碑陰記」に朱筆で取消線「三字宜削」は朱筆 |
| | 3 誌版正（三字下げ） | （なし） | |
| | 4 石槨裏面（三字下げ） | （なし） | |
| （参考）春嶽公記念文庫「松栄君年譜」 | | | |
| 稿本D | 1 大母松栄君年譜（二字下げ） | 安政四年丁巳夏閏五月 | 花押あり 専用の木箱あり |

付されている。最後には「書於冥々齋中」とあるが、当時、春嶽は靈岸島中屋敷（江戸城下、永代橋下流右岸）の一室に閉居していた²¹⁾。この序文は、暗暗としたその一室で書かれたようである。

「松栄公年譜稿本」の構成は、前掲の表のとおりである。3・4に日付はないが、稿本Aを書き写した稿本Bにあることから、1・2と同時期になろう。

1は、享和3年（1803）12月10日の誕生から安政4年閏5月29日の葬送まで、松栄院の55年の生涯を編年体で綴り、続けて人となりと賢行を紹介する。なお、稿本Cは各所に衍文や脱字・脱語を記した紙片が挟み込まれている。

ここで、1の一例として、序文に「年譜中詳悉セリ今此ニ不贅」とある安政4年閏5月9日から翌10日にかけての叙述をみてみよう。

資料3「大母松栄君年譜」（「松栄公年譜稿本」稿本B）

同九日、人事不省醒覺少而多眠、且小水不利。大君遣老女飛鳥井平松氏詢病且賜物。君歡謝勉強卒然曰難有難有謝辭也此訓阿理嘉答久同日。大君又使御伽坊主詢病、初更、官医診脈、脈細數而不整、頻進熊參之類、君平素好喫煙、病中亦頃刻不捨棄煙管、煙二更、開目言喫煙、弧乃進管、又親自進米汁、因喚云、越前守在此焉、越前守在此焉、幸勿煩尊念、君乍顧弧云、超倫院乎、嗚呼至今、鍾愛超倫君之深至是、儻令超倫君今尚在世、而奉養以尽其驩欣、則君之慰情可知已、為之子孫者、烏得不潛然淚灑膈塞、而愁不表於面貌也。哉、徹夜、侍坐君之床側、不復曾見佳候、同十日庚寅、五辰時牌、君脈殆將絕、吐稠痰粘液二回、弧急手以水灌口、侍女亦皆如此、医官亦術尽收手、而君遂不起、時年五十五、嗟、悲夫、是夕夫人細川氏登于館永訣

（読点は原文による、取り消し線は原文の取り消し跡、下線は原文の修訂跡）

9日の時点で、松栄院は意識障害に陥っており、目を覚ますことは少なく、一日の多くは眠ったままで、排尿も困難な状態であった。先に「家譜」の記述として紹介したとおり、この日は將軍家定が老女平松（飛鳥井）を遣わして松栄院を見舞っている。その折に拝領物もあったようで、すでに相当衰弱していたようすの松栄院であるが、この時は「難有（阿理嘉答久）」と礼を言い、謝意を伝えたという（同日中に家定は御伽坊主を遣わして再び松栄院を見舞っている）。

また、松栄院は以前より、煙草を好んでいたようで、病を得ても煙管を手放すことはなかったという。初更（午後7時頃～9時頃）に官医が脈を取ると、細く、間隔も乱れていたというが、その後、二更（午後9時頃～11時頃）には煙草を欲し、食事も口にしている。この時、松栄院は春嶽をそばに呼び、夭折した超倫院（於義丸）²²⁾への思いを語りかけたという。春嶽はそのまま徹夜で侍座した。

松栄院は回復の兆しを見せず、10日の辰牌（午前8時頃）には脈が薄まり、濃い痰を2度吐いている。それを見た春嶽は、急ぎ手で水をすくい、松栄院の口にそそいだという。侍女たちもみな春嶽にならって介抱し、官医も手を尽くしたが、松栄院は逝去した。夕方には、春嶽の正室勇姫が松栄院の元へ上がり、最後の別れを告げている。

ところで、春嶽は前年3月から松栄院が逝去する前々月まで在国中で、4月25日に福井を出発し

て5月11日に江戸へ到着していた。前出の「家譜」には²³⁾、江戸へ到着したその日、春嶽は前日に宿泊した品川宿から「御旅装之儘」上屋敷へ入り、即刻、江戸城へ上がって老中に挨拶を済ませると、続いて中屋敷へ入り、松栄院に面会したとある。

1には、このことも詳述されており、春嶽が在国中であった4月17日に松栄院は食べ物を戻し、手足に痙攣を起こしたとある(天保8年(1837)8月16日にも同様の症状を発していたが、その時は同年10月に快癒している)。これが悪疾であったようで、5月11日に面会した時には「目精不清涼而音貌異常」であったという。この時、春嶽は松栄院が深刻な病であると察しながら、つとめていつものように接している。

その後、松栄院は同月下旬に復調の兆しを見せたが、翌閏5月5日に症状が急変し、櫛仙院が手を施したものの、効果は現れず、松栄院は「頻上竄、而神経攣急」して、頭や手足を振揺させ、言語も不明瞭であったという。なお、勇姫は8日にも一度、中屋敷へ入って松栄院に面会しており、逝去する前に対面できていたようである。

前述のとおり、稿本Dは稿本Cを浄写しているが、2～4を書き写さず、1で完結している。これは1と2～4とで「後世ニ伝へ」る形態が異なるためであり、2は何処の石碑か未詳であるが、稿本Bに「碑陰銘」という原題があるように碑陰の原文のようである。3・4は松栄院の棺を納めた石槨²⁴⁾の銘文の原文であろうか。

3. 松栄院の遺髪を埋めた「小さき御墓」

松栄院の逝去から約四半世紀後の明治10年代(1877～1886)中頃、春嶽は「真雪草紙」(明治13年起稿、同16年脱稿)²⁵⁾という随筆を残している。「心に覚へたるまゝを書しるし」(序文)たというその中に松栄院を主題とした次のような逸話がある²⁶⁾。

資料4「松栄公遺髪」(『真雪草紙』)²⁷⁾

松栄公逝去せられ給ひし時、余ハ看護のためニ侍座せり。二日程にて御入棺の式あり。其前公の御中藹勤めしき尾と云ふ人あり。比丘尼ニなりて放光院と号す。御住居中の人材也。余ハ放光に内々依頼して、公の御遺髪を請求せり。放光院ことの外よろこひて、人しれず、ひそかに御入棺前ニ、公の御髪を少し剪りて紙包にし、余に呈す。余もひそかにこれをひめ置たり。後ニ銅板にて包み、桐の箱へ納め、天梁公御配偶なるを以て、天梁公越前守御墓の横へ納めて、小さき御墓を造立せり。松栄公も御本懐と思召候はんと想像せらるゝ也。

これは逝去から「二日程」後の「御入棺の式」²⁸⁾でのことで、春嶽が松栄院の中藹であった放光院(当時はきを)²⁹⁾に「内々依頼して」松栄院の遺髪を乞うと、放光院はこのほか喜び、「人しれず、ひそかに御入納前ニ」松栄院の髪を少し切り取り、紙包みにして渡してくれたという。

春嶽は「ひそかにこれをひめ置」き、「後ニ」銅板で包み、桐の箱に入れ、「天梁公越前守御墓の横」に安置して「小さき御墓」を造立したといい、松栄院も本望であろうと結んでいる。

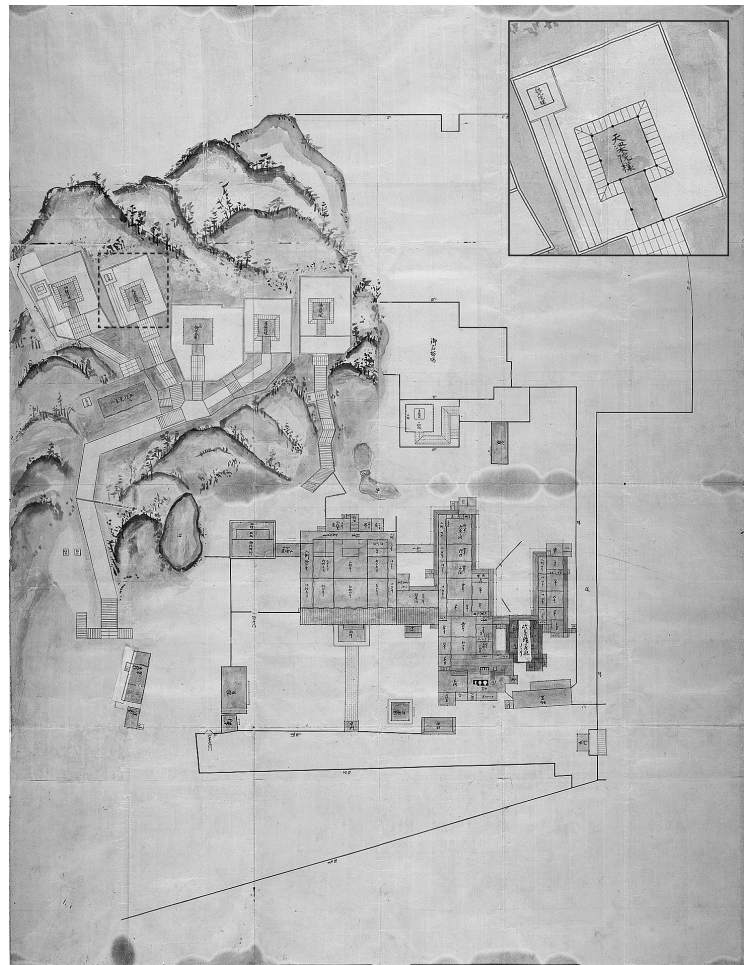
春嶽が松栄院の遺髪を埋めて「小さき御墓」を造立したというその場所は、現在の足羽山北麓(参

考写真)になる。「天梁公越前運正寺御墓」は後に改葬されているため、その「横」に造立したという「小さき御墓」の行方は未詳³¹⁾であるが、碑陰の原文が「祖妣徳川夫人碑陰記」(資料5、写真3)として現存している。

資料5「祖妣徳川夫人碑陰記」

祖妣夫人徳川氏、諱瀨子、征夷大将軍贈正一位太政大臣徳川文恭公之第十一女、年十五歸於我祖考諱齊承字某姓松平氏、祖妣性行端淑、不敢挾官家之貴、閨門肅穆、宛有閨雎之風矣、及祖考歿、為其冥福、晨夕誦仏經二十余年、不敢一日懈也、又嘗納一妾於祖考、歿後以為侍嬪、憐之尤厚、安政四年閏五月十日、以疾終於東京神田橋邸、距生享和三年、得齡五十有五、生一男一女、皆夭、葬於城南西窪天徳寺先壙之次、釈氏諡曰松栄院勁

譽彰月禎寿大姉、祖妣平居、楽道人之善、而不喜聞其過、好讀書通大指、兼善写字、謄書已数十卷、性又至孝、文恭公之薨也、哀慟殆絶、喪除猶托病不起、侍嬪欲慰之、更進玩具、一切屏之、見者為之感動、又設公神主、上花進茶、皆躬親之、未嘗假侍嬪之手、嗚呼祖妣之賢行可伝者、不特此也、然居内未嘗出乎外、則舍永誰有見聞之者耶、然今又不表而出之、懼其経年之久、竟歸泯滅、今茲五月十日、遭其十三忌、故埋遺髮於福井運正寺祖考墓側、因建碑以述其概略如此、明治二年五月某日、孫従二位行権中納言兼議定職源慶永抃涙謹記、



参考写真 松平文庫「運正寺指図」³⁰⁾
(右が北、右上は点線四角「天梁院様」部分の拡大図)

碑陰も、前述の1(および2)と同様に春嶽本人が記している。ただ、明治2年(1869)5月と時期は異なり、その10日、松栄院の十三回忌に「福井運正寺祖考墓側」に「遺髮」を埋めて「碑」を建立したとある。「真雪草紙」の「後二」は明治2年5月10日、十三回忌のことで、春嶽は松栄院が逝去してから12年の間、その遺髮を「ひそかに」「ひめ置」いていたようである。

ちなみに前出の「家譜」によると³²⁾、春嶽は同年5月、東京にあって民部官知事に仰せ出だされている(15日)。そのため、十三回忌のその日は福井にいなかったようであるが、同年の3月6日に京都から福井へ到着し、4月9日に東京へ出発するまで、約1か月の間は「三之丸の館」に滞在して

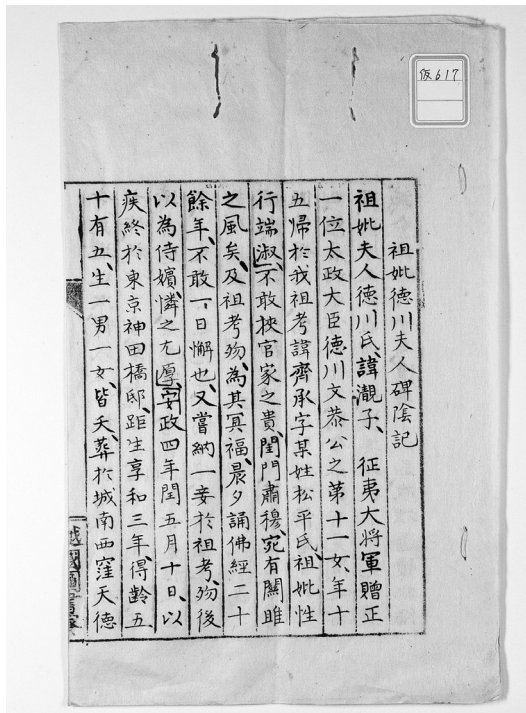


写真3 「祖妣徳川夫人碑陰記」

おり、その間、3月25日と4月7日に運正寺へ参詣していた³³⁾。『真雪草紙』の逸話が現実を描写している可能性は十分にある。

まとめにかえて

本稿でとりあげた松平文庫「松栄公年譜稿本」は「大母松栄君年譜」の稿本4冊(A・B・C・D、原題の「概伝」を稿本Bで修訂)のうちの2冊(B・C)であった。これは安政4年(1857)閏5月29日に松栄院の逝去から程なくして書き上げられた原稿(稿本A、現存は未詳)が翌5年9月に完成(稿本D、越葵文庫「松栄君年譜」)するその過程で作成された2冊であるが、稿本Dにはない序文(資料2)が添えられている。

その序文は「大母松栄君年譜」の著者である春嶽が稿本B・Cを「表装」するにあたって同6年3月14日に書いた自序で、そこから、稿本の冊数や稿本A・

Dを含めた各稿本の時期が明らかになり、「松栄公年譜稿本」と「松栄君年譜」の稿本としての位置と両者の関係も跡付けられて「大母松栄君年譜」の全体像が浮かび上がってくる。同時に稿本A→B・B→Cは平本平学が書写していたこと、稿本Bを以て橋本左内が添削していたこと、そして稿本B・Cを併せて春嶽が「表装」したことなど、「大母松栄君年譜」の成立の過程も明らかになり、稿本B・C・D間の文章の変遷や「安政四年丁巳夏閏五月」という日付が付された稿本D(序文では「安政五戊午年九月卒業」)の成立や背景を再検討していくための糸口を与えている。

また、松平文庫「祖妣徳川夫人碑陰記」(資料5)は『真雪草紙』で「後二」とされている松栄院の遺髪を埋めた「小さき御墓」の造立が明治2年(1859)、「其十三忌」であったことを導き出すとともに現在、行方が未詳である逸話の中の「小さき御墓」が確かに存在していたことを裏付けている。

「松栄公年譜稿本」「祖妣徳川夫人碑陰記」は故人の追悼と顕彰を目的としているため、その点には留意する必要があるが、これらを家史や『昨夢紀事』等とあわせてさらに読み解いていけば、春嶽や福井藩、そして幕府の中に松栄院の存在を位置づけ直すことができるであろう。それは福井藩や幕府における松栄院の影響力、はじめにでふれた「松栄院の力」をひもといていくことにもなると期待される。

注

- 1) 齊善も父は家斉であり、実方では異母姉になる。また、春嶽も父が家斉の実弟であり、実方では従姉になる。
- 2) 本川幹男「松平慶永と福井藩政」(『越前松平家家譜 慶永 3』福井県文書館資料叢書6(福井県文書館、2011年))

解説（1節「慶永の福井藩松平家相続」2項「慶永と親族・縁戚大名」）。

- 3) 「松栄公年譜稿本」は資料番号 A0143-02235、複製本番号 A5291。「祖妣徳川夫人碑陰記」は資料番号 A0143-02236、複製本番号 A5291。インターネット資料検索・閲覧システム「デジタルアーカイブ福井」（以下、「DA 福井」という）で画像の閲覧が可能。
- 4) 仮養子は「先達而」斉匡が家慶に内慮を伺ったうえで、勝善と内約を取り交わしており、前年11月25日に「台命を以」仰せ出だされ、正式に決定していた（『越前松平家家譜 慶永 1』福井県文書館資料叢書4（福井県文書館、2010年）3頁）。
- 5) (1) 越葵文庫「家譜」(2) 松平文庫「御家譜」(3) 同「越前世譜」の斉善代、(1)(3)の慶永代。(1)の慶永代は前掲注2・4『越前松平家家譜 慶永』として翻刻が刊行されている（全6冊）。
- 6) 松平文庫「少傅日録抄（斉善付側向頭取日記、江戸并道中、初入在国、逝去後迄）」（資料番号 A0143-01105、複製本番号 A4387、「DA 福井」で画像の閲覧が可能。なお、「感冒」「喘息」「疥癬」は前掲注5(1)～(3)の斉善代による。
- 7) これは老中水野忠邦から「公辺御指支之儀有之ニ付、於御国許去月廿八日發シニ相成様御差図」があり、8月27日巳年ノ上刻（午前8時頃）に逝去、同日夕に使者が福井を出発して9月5日夜に江戸へ到着、翌6日朝に幕府への届出したものとして取り扱われている。
- 8) 当日は斉省・斉貴が「御不快ニ付」、糸魚川藩主松平直春・広瀬藩主世嗣松平直諒が名代として登城した。
- 9) 前掲注8 松平直春。
- 10) 越葵文庫「家譜 百七十五 慶永公 従天保九年二月到同年十月 付録従文政十一年到天保八年」（福井市立郷土歴史博物館寄託）。「DA 福井」上で画像の閲覧が可能。
- 11) 前掲注4『越前松平家家譜 慶永1』147頁。
- 12) 天保14年（1843）正月27日に常盤橋上屋敷が焼失（江戸城本丸へ避難、そのまま逗留）、3月5日に神田橋門内田安慶頼屋敷・家作を拝領、同月17日に普請、5月6日に引移、安政4年（1857）9月21日に返上（前掲注2『越前松平家家譜 慶永 3』、および松平文庫「江戸御屋鋪御由緒并坪数書」（資料番号 A0143-21401、複製本番号 W0697）、同「江戸邸宅ニ関スル部」（資料番号 A0143-21403、複製本番号 W0697））。
- 13) 前掲注5「越前世譜」には、この他に6日～8日・11日・13日～17日・19日～6月1日の各日に中屋敷へ入ったという記述がある（11日は止宿）。
- 14) 食事の摂取量や薬の内服量とともに塞ぎがちで便通もなく、夜半頃より次第に疲弊していったことを伝えている。
- 15) 松栄院の葬送先は、近例に従えば寛永寺・増上寺であるが、越前松平家の菩提所である天徳寺にしたいと願っている。
- 16) 『昨夢紀事』上巻・下巻（八尾書店、1896年）、『昨夢紀事』第1～第4（日本史籍協会、1920年～1921年）・『昨夢紀事』一～四（東京大学出版会、復刻版1968年）。「昨夢紀事」の成り立ちについては、本誌掲載の長野栄俊「近代における越前松平家の史書編纂—「昨夢紀事」「続再夢紀事」などの伝存写本をめぐって—」参照。なお、この松栄院の逝去にかんする叙述者は、雪江・平本平学（本文後出）のうち、雪江になるようである。
- 17) 前掲注13のとおり、19日～29日の各日は上屋敷から中屋敷へ入っているため、その日のうちに上屋敷へ戻ったようである。
- 18) 隠居は安政5年（1858）7月5日、急度慎は同日から万延元年（1860）9月4日まで（引き続き文久2年（1862）4月25日まで慎）。

- 19) 『春嶽公記念文庫解説目録－文書編－』（福井市立郷土歴史博物館、1972年）22頁。
- 20) 平本平学は安政5年8月12日、江戸で病死。
- 21) 前掲注2『越前松平家家譜 慶永 3』204頁。
- 22) 文政12年（1829）7月23日誕生、天保6年（1835）4月4日逝去。
- 23) 前掲注2『越前松平家家譜 慶永 3』143頁。
- 24) 大正15年（1926）7月に海晏寺へ改葬されている（前掲注2『越前世譜 慶永 3』161頁）。
- 25) 松平春嶽全集編纂刊行会編『松平春嶽全集』第一巻（原書房、復刻版1973年）。底本は福井市立郷土歴史博物館所蔵福井市春嶽公記念文庫。
- 26) 他に「松栄公ノ正直」「伊東燕凌軍談」という逸話もあり、また「涼晴君嫌疑」では主要人物の一人として登場している。このうち、「伊東燕凌軍談」については、本誌掲載の柳沢美美子「福井藩松平家奥向における表錠口と「表御メ切」の機能－奥向の閉鎖性と内部での開放性－」参照。
- 27) 前掲注25『松平春嶽全集』102頁・103頁。
- 28) 前掲注16『昨夢紀事』では「十一日の夜」、前掲注3「松栄公年譜稿本」では「十一日歛棺從之夜至子夜」で「十三日納槨」（稿本Bで「納棺」が「納槨」に修訂されている）。
- 29) 後に放光院は「向山と申親類共江付此地江参り」、「向山事当時駿府学門所取メり被仰付此方ニ同居致」したという（松平文庫「(近況報告の書状)」(資料番号A0143-00957、複製本番号A4144、「DA福井」で画像の閲覧が可能))。この「向山」は元幕臣で漢詩人の向山黄村で、明治17年（1884）4月24日に放光院の訃報に接した春嶽は、翌25日に黄村のもとへ女中佐藤崎尾（静岡県士族佐藤肇養母）を遣わし、喪中見舞と誄詞を贈っている。その誄詞に「特ニ公主ノ病痾ニ罹リ薨去前後ノ配勞ハ数十人女中ニ冠タリ」とあり、そこでも松栄院の逝去にふれている（『越前松平家家譜 慶永 5』福井県文書館資料叢書8（福井県文書館、2011年）184頁）。
- 30) 資料番号A0143-21462、複製本なし、「DA福井」で画像の閲覧が可能。なお、本図の作成は松栄院が逝去する以前の弘化4年（1847）8月である（「天梁院様」の同一区画内にある「巍光院様」は斉承の弟善道）。
- 31) 「天梁公越前運正寺御墓」は「大安寺観音堂（旧松平斉承御霊屋）」（大安寺観音奉賛会（大安寺地区自治会連合会・宮ノ下地区自治会連合会）が管理、2021年3月31日付で福井市指定文化財（建造物）に指定）として現存している。
- 32) 『越前松平家家譜 慶永 4』福井県文書館資料叢書7（福井県文書館、2010年）73頁～79頁。
- 33) 春嶽は翌3年6月29日から7月26日まで、再び福井に滞在している。そして、到着した翌日の30日に運正寺へ参詣し、斉善の霊前に花を供えている。これが「小さき御墓」を造立した後、最初の参詣になるとみられる（前掲注32『越前松平家家譜 慶永 4』156頁）。